

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2022 星野 太



いかにして共に生きるか

「食べること」と「リズム」について

ROLAND
BARTHES
COMMENT
VIVRE
ENSEMBLE
Cours et séminaires
au Collège de France
(1976-1977)

星野 太（総合文化研究科・准教授）

概要

いかにして共に生きるか。これは、フランスの批評家ロラン・バルト（1915-1980）が晩年に取り組んだテーマの一つであった。

バルトはこの「共生」をめぐる書物を上梓する前に急逝したが、本講義では、残された講義ノートと録音データをもとに、そこからいくつかの問いを引き出すことを試みたい。

とりわけ、バルトが用いている「イディオリトミー」という謎めいた概念に着目し、おもに「食べること」と「リズム」について考察する。

概要

0. 導入——拙稿「食客論」

1. ロラン・バルト『いかにして共に生きるか』

半世紀前の「オンライン授業」／共に生きるということ／死によって中断された思想

2. 共生のリズム——「イディオリトミー」とは何か

イディオリトミックな共同体／ラカリエール『ギリシアの夏』／アトス山の修道院

3. 「食べること」をめぐって——孤食と共食のあいだ

ブリア＝サヴァラン『美味礼讃』／藤原辰史『縁食論』／レストランという場

0. 導入

拙稿「食客論」
(『群像』で2021年より連載中)



『群像』 2021年5月号、講談社

- 「共生」という言葉に対する批判意識

——「誰が（何が）」「誰と（何と）」共生するのか？

- ひろく普及し、人口に膾炙した言葉がもたらす批判意識の欠如

——「SDGs」などもその一例

1.

ロラン・バルト
『いかにして共に生きるか』



ロラン・バルト著、野崎歓訳『ロラン・バルト講義集成 1
いかにしてともに生きるか—コレージュ・ド・フランス講義
1976-1977年度』 筑摩書房、2006年

ロラン・バルト

20世紀フランスを代表する批評家、記号学者。

1915年、フランスのシュルブールに生まれ、パリ大学で古典ギリシア文学を学ぶ。

最初の著書である『エクリチュールの零度』（1953）が好評を博し、その後も『神話作用』（1957）や『モードの体系』（1967）をはじめとする多くの著作を通じて文学・美術・広告などを分析した。日本について論じた『表徴の帝国』（1970）も有名。高等研究実習院教授を経て、1977年よりコレージュ・ド・フランス教授。

1980年、交通事故で逝去。



Roland Barthes, Comment vivre ensemble. Cours et séminaires au Collège de France (1976-1977), Seuil, 2002.



Roland Barthes, Comment vivre ensemble. Cours et séminaires au Collège de France (1976-1977), Seuil, 2002.

- 「共生」ではなく「いかにして共に生きるか」

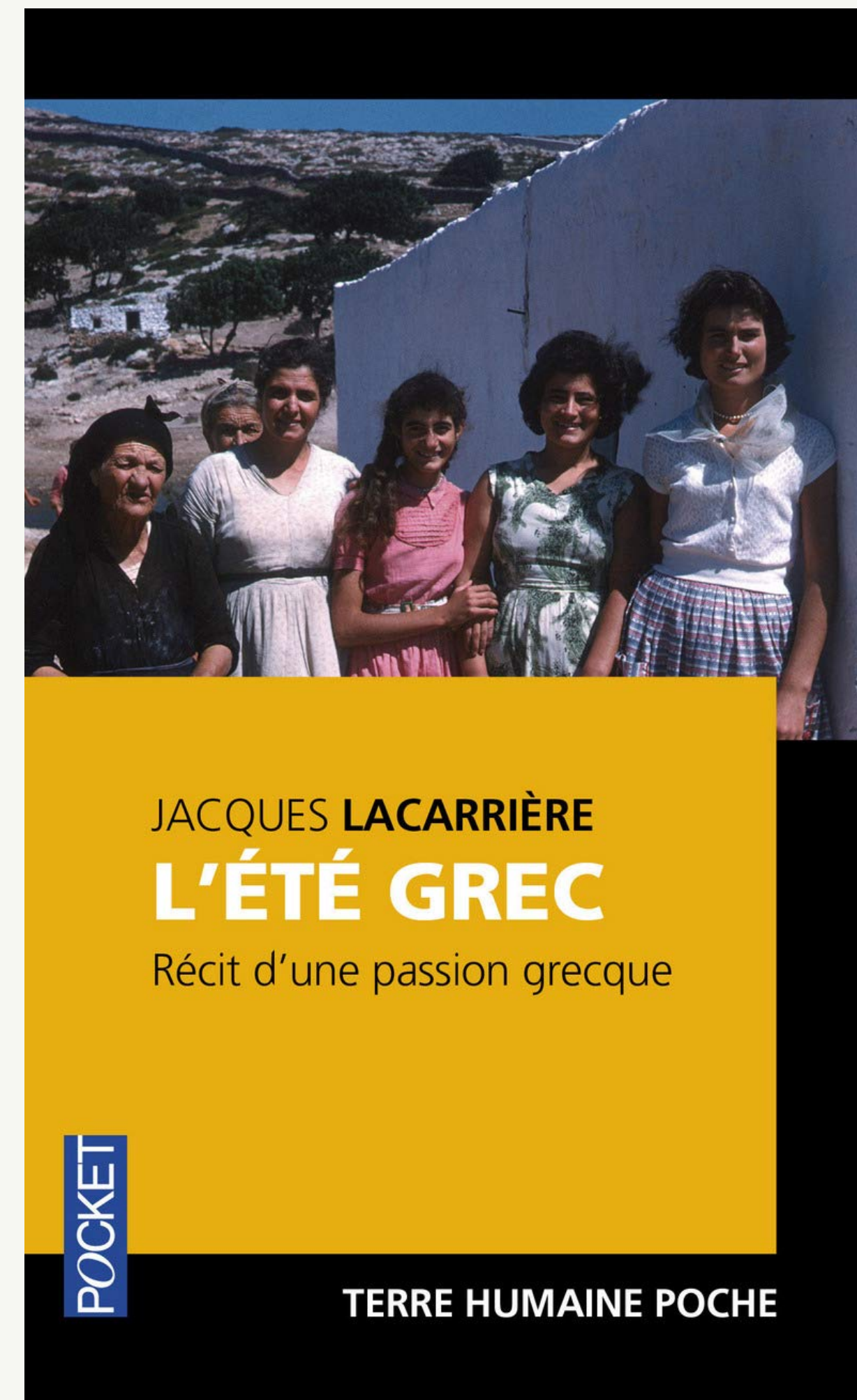
——概念 (co-existence) ではなく問い (comment vivre ensemble) として

- その問いに応答するためのさまざまなトポス

——その最たるものとしての、アトス山の修道院

2.

共生のリズム
「イディオリトミー」とは何か



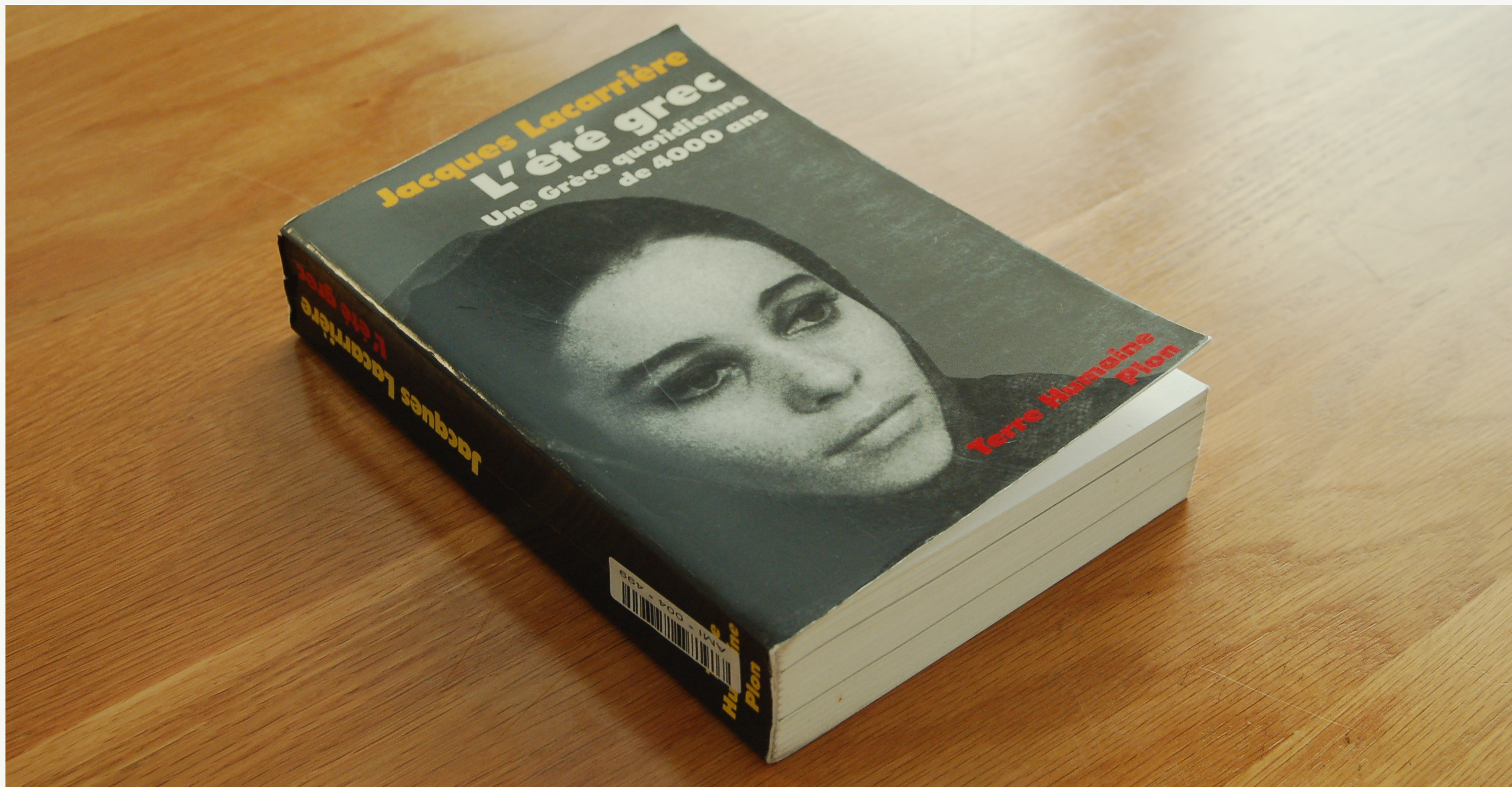
Lacarrière, Jacques, L'Été grec, Terre Humaine Poche, 2001.

イディオリトミー

「**イディオリトミー (idiorrythmie)**」——ギリシア語の「イディオス (自分の)」と「リュトモス (流れ、リズム)」からなる合成語。「自分に固有のリズム」。

バルトは講義のなかで、**ジャック・ラカリエール『ギリシアの夏』** (1976) の参照をうながしている。著者ラカリエールは、1925年にリモージュに生まれ、2005年にパリに没した在野の作家。

およそ20年にわたるギリシア旅行の経験にもとづいて書かれた『ギリシアの夏』は、当時のフランスの読書界にも好評をもって迎えられた。



Lacarrière, Jacques, L'Été grec. Une Grèce quotidienne de 4000 ans, Paris, Plon, 1993.



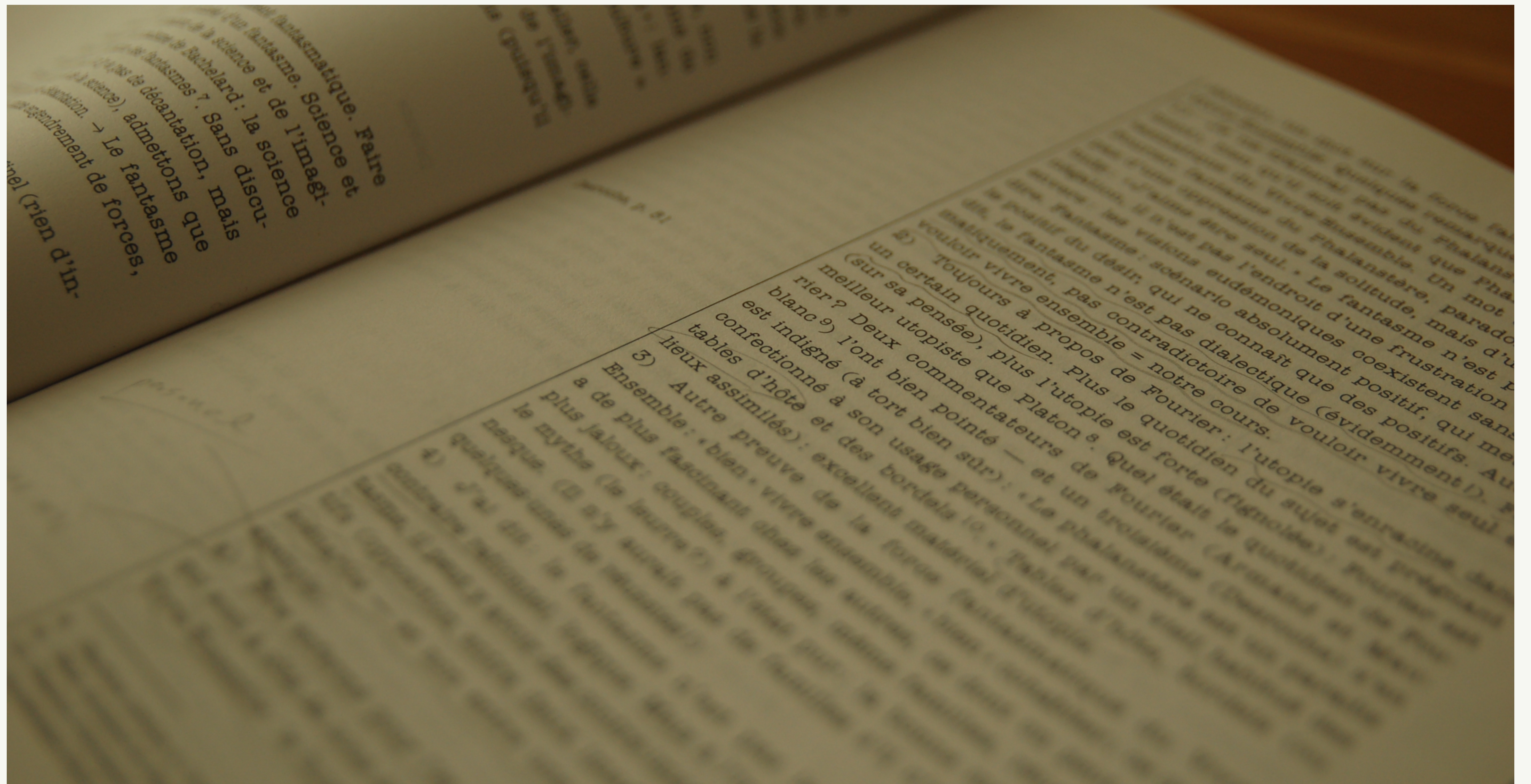
Lacarrière, Jacques, L'Été grec. Une Grèce quotidienne de 4000 ans, Paris, Plon, 1993.

ラカリエール『ギリシアの夏』

この〈聖なる山〉は、ある特殊な生活様式を生み出した。それが、ここで**イディオリトミー**とよぶものである。アトス山の修道院は、実のところ二つの異なるタイプに分かれる。共住的、あるいは共同体的といわれる修道院では、食事であれ、典礼であれ、作業であれ、いっさいは共同で行なわれる。いっぽう、ここでイディオリトミックとよぶ修道院では、各々が文字通り個人のリズムで生活する。修道士たちはそれぞれが個室をもち、（毎年恒例の祝典を除けば）自室で食事をし、修道院にやってきたときに持っていた所持品をそのまま持つことが許されるのである。

[Lacarrière, Jacques, L'Été grec. Une Grèce quotidienne de 4000 ans, Paris, Plon, 1976:40]

- 各々のリズムで共同生活を送るという「ユートピア」
- 具体的現実のなかに存在する「共生の耐え難いイメージ」



Roland Barthes, Comment vivre ensemble. Cours et séminaires au Collège de France (1976-1977), Seuil, 2002.

バルト 『いかにして共に生きるか』

幻想（ファンタズム）はその合理的、論理的な反対物を持ちえません。しかし幻想そのもののなかには、対抗イメージ、あるいは否定的な幻想とでもいったものがあります。

[……] 個人的な例を挙げましょう。〈共生〉の耐えがたいイメージ、わたしにとってそれは、レストランで隣の席に座っている感じの悪い連中とともに、永遠に閉じ込められることなのです。

[Barthes (2002) : CR-ROM]

3.

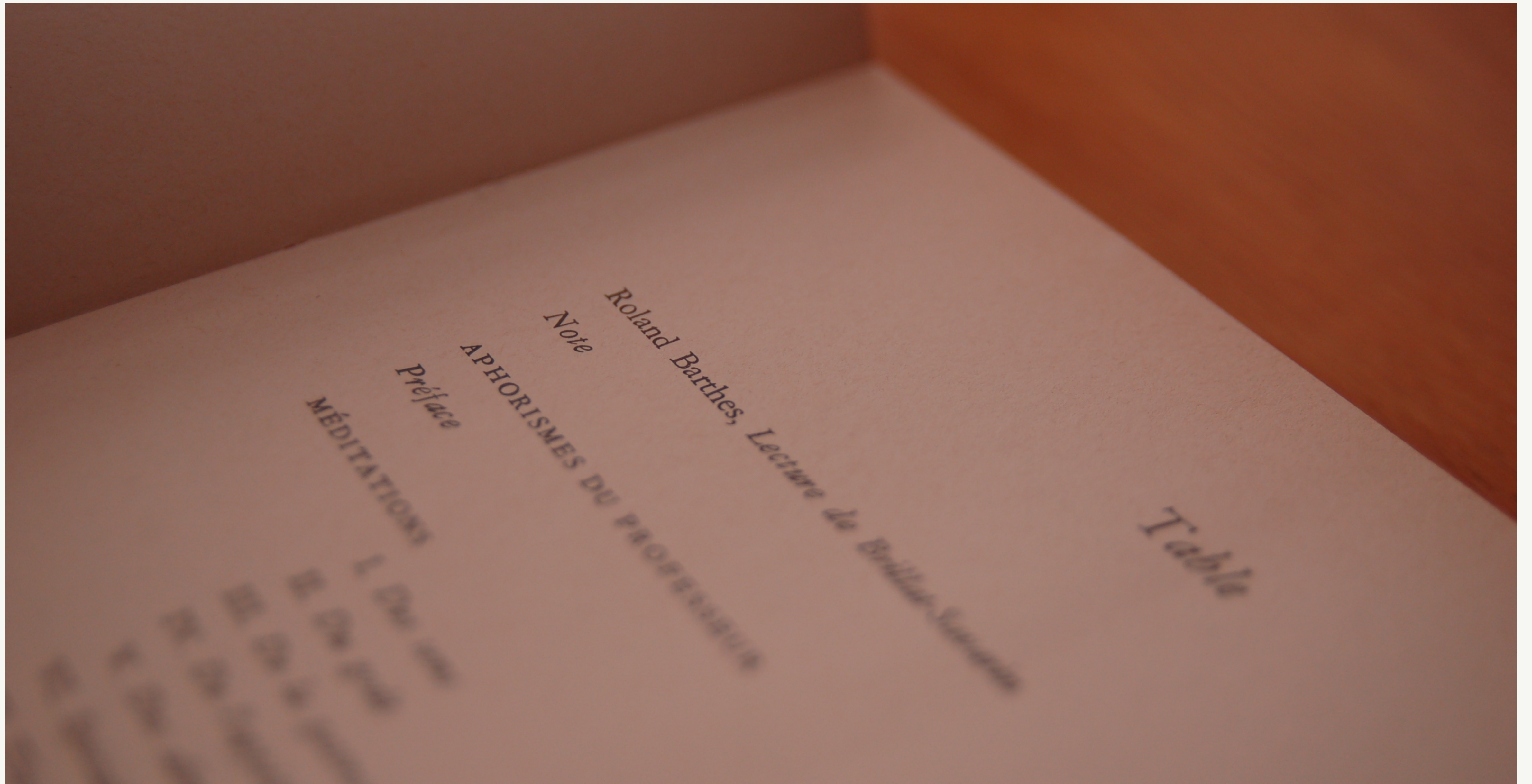
「食べること」をめぐって
孤食と共食のあいだ



藤原辰史『縁食論——孤食と共食のあいだ』ミシマ社、2020年



Brillat-Savarin, Physiologie du goût avec une Lecture de Roland Barthes, Paris, Hermann, 1975.

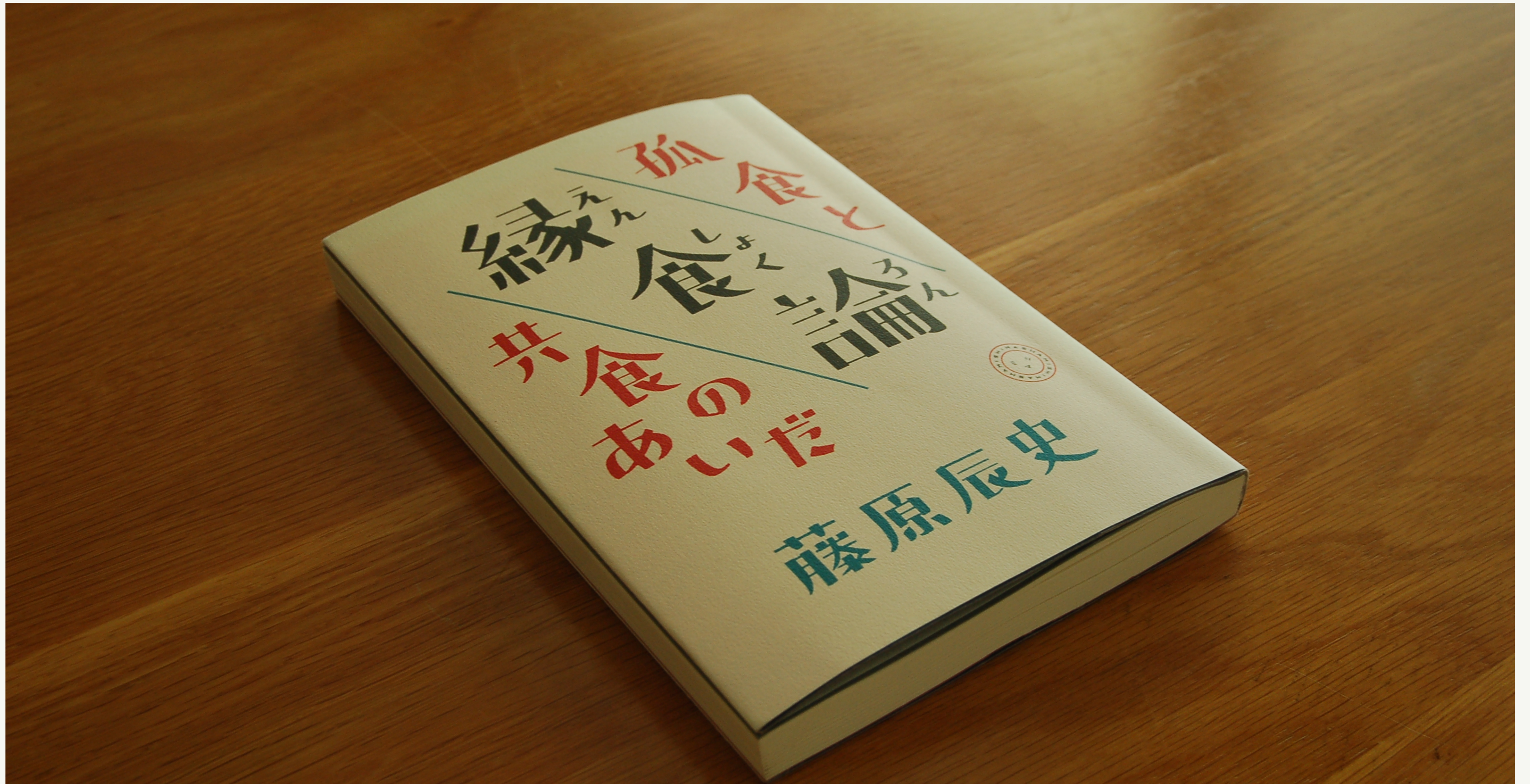


Brillat-Savarin, Physiologie du goût avec une Lecture de Roland Barthes, Paris, Hermann, 1975.

ブリア = サヴァラン

1755年4月1日、スイス国境付近の小都市ベレーに生まれる。ディジョンの大学で法学を修めたのち、故郷に戻り弁護士となるが、フランス革命のおりに三部会の代議士としてパリに派遣されるや、ジャコバン派から王党派とみなされ、にわかに立場を危うくする。そのため、1793年にはスイスを經由してアメリカに亡命。その3年後には総裁政府の成立を機にフランスに戻り、その後はパリの破毀院の判事として終生奉職した。

『味覚の生理学』はこの法律家の最晩年の著書であり、ブリア = サヴァランがこの世を去る2ヶ月前に匿名で出版された。



藤原辰史『縁食論——孤食と共食のあいだ』ミシマ社、2020年

藤原辰史 『縁食論』

孤食は評判が悪い。しかし、親友たちと食べることに負けないくらい楽しいこともあるし、気が楽なときだってある。この批判用語には、どこか「家族絶対主義」の匂いがしなくもない。家族絶対主義とは私の造語だが、家族の崩壊が世の中の崩壊の最大の原因である、家族の幸福が世の中の幸福の中心にある、という近代市民社会でよくお目にかかる考え方なことだ。

[藤原辰史『縁食論——孤食と共食のあいだ』 ミシマ社、2020年、p.10]

[……] 私たちはしばしば孤食を克服する概念として共食を置いてきた。しかし、あまりにも私たちは共食に期待をかけすぎていないだろうか。こころとからだに痛みを覚えながら、それでもひとりぼっちで食べざるをえない子どもたちに居場所を与えるヴィジョンとして、あまりにも一家団欒というイメージに拘泥しすぎてこなかっただろうか。

[同、p.18]

『味覚の生理学』

しかし、これらのことよりもはるかに社会秩序にとって有害なのは、ひとりでの食事が利己主義を助長することである。というのもそのために、周囲のことなどお構いなしに、自分のことだけ考える、配慮を欠いた人間がしばしば散見されるのである。われわれの日々のつきあいのなかでも、食事の前、その最中、あるいはその後の態度をみれば、会食者のなかで日頃からレストランに出入りしている人間は、すぐにそれとわかるものである。

[Brillat-Savarin, Physiologie du goût, ou Méditations de gastronomie transcendante, Paris, Sautolet, 1826 : tome II, 136]

- バルトによる『味覚の生理学』への微妙な評価
——「孤食」批判をはじめとする狭隘な姿勢
- ブリア = サヴァランの背後に透かし見える思想
——家族・異性愛・人間中心主義

- **ほかの人々と空間を共にすること**

——孤立とも団結とも異なる「つかの間の共同体」として

- **大小さまざまな生物が交差する場としての飲食の場面**

——生態学的（エコロジカル）な飲食の思想へとむかって

引用・参考文献

- Barthes, Roland, *Comment vivre ensemble. Cours et séminaires au Collège de France (1976-1977)*, Paris, Seuil, 2002. (『ロラン・バルト講義集成1 いかにしてともに生きるか——コレージュ・ド・フランス講義1976-1977年度』野崎歓訳、筑摩書房、2006年)
- Brillat-Savarin, *Physiologie du goût, ou Méditations de gastronomie transcendante*, Paris, Satelet, 1826. (『美味礼讃』関根秀雄・戸部松実訳、岩波文庫、1967年／玉村豊男訳、中公文庫、2021年)
- Brillat-Savarin, *Physiologie du goût avec une Lecture de Roland Barthes*, Paris, Hermann, 1975. (ロラン・バルト／ブリヤ＝サヴァラン『バルト、〈味覚の生理学〉を読む 付・ブリヤ＝サヴァラン抄』松島征訳、みすず書房、1985年)
- Coste, Claude, « Préface », in Roland Barthes, *Comment vivre ensemble. Cours et séminaires au Collège de France (1976-1977)*, Paris, Seuil, 2002.
- Lacarrière, Jacques, *L'Été grec. Une Grèce quotidienne de 4000 ans*, Paris, Plon, 1976.
- Marty, Éric, « Avant-propos », in Roland Barthes, *Comment vivre ensemble. Cours et séminaires au Collège de France (1976-1977)*, Paris, Seuil, 2002.

- 桑田光平『ロラン・バルト——偶発事へのまなざし』水声社、2011年。
- 藤原辰史『縁食論——孤食と共食のあいだ』ミシマ社、2020年。